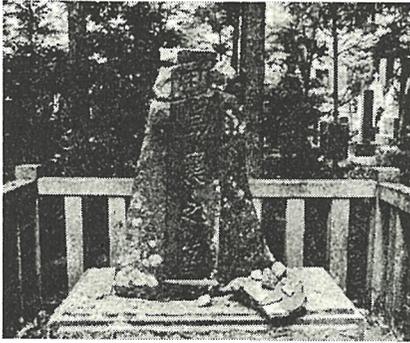


新島襄墓碑の現況と修復について

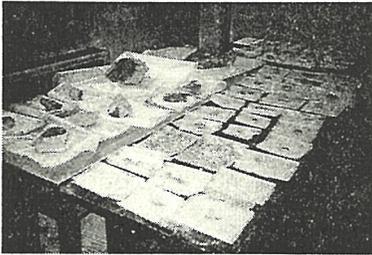
鈴木重治

六月中旬、学内外の多くの憂慮とさまざまな思いにつつまれながら、校祖の墓碑は若王子山頂から同志社大学の構内へ慎重に搬入された。その後、学内諸機関での検討を経て、考古学研究室を中心に校地学術調査委員会によって、八月上旬までに修復のための基礎資料の作成がおこなわれた。

破損された墓碑は、長期間の風雨や気温変



(破損直後の墓碑)



(細片となった墓碑頭部)

化、さらに地衣類などによる素材の生物劣化が進んでいて、物理的に生じた新たな破損部分の生々しい剝離面とともに、多くのクラックや、素材表面の変色が観察され、当初の状態への復元は、きわめて困難と考えられた。つまり、島の字以下の残存墓碑についても、多くの剝離面や、大小のクラックがさまざまな方向に走っており、さらに破損した墓碑頭部の細片は、かなりの部分がバラス状を呈している、挙大や指頭大の破片ですら六十片以上に及んでいるからである。

一方、現在の日本の石造美術品の修復技術は、高度に発展した方法と、新しく開発された樹脂を使用することによって、世界的にも注目をあびている。このことは、国宝や重要

文化財の復元修理の実績をみればあきらかであり、とりわけ考古学の分野で活用されている。「石材への樹脂含浸」、「シランと有機樹脂混合による石粒の含浸固定」、「石造文化財の修復における合成樹脂の応用」など、考古学関係の成果は、今回の修復にあたっても大いに参考となろう。

もとより、石造物の保存状態は、物質のもつ属性によって左右されるのは当然であり、校地学術調査委員会での、協議の中で、森浩一教授が指摘したように、修復後に再び墓碑として野外に立てるのは不可能であるとする指摘は、きわめて重要である。校地学術調査委員会で確認した基本的な認識は、同志社としての歴史的、文化的、精神的財としての修理・復元は、おおむね可能であり、樹脂を減圧含浸するための機器を持つ元興寺文化財研究所の協力を得て修復するというのである。現在、そのための作業が進められている。

なお、修復作業の参考のため、撮影年代のあきらかな校祖墓碑の写真をお持ちの方に、資料の提供を心からお願ひしたい。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)